

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【12】常滑街道…鳴海から名和へ

1 鳴海城と大高城

知多半島は古くから伊勢湾をおさえる要衝として発展してきました。海上ばかりでなく陸上交通の面でも、名古屋から知多へと伸びる丘陵部には鎌倉街道や東海道など東国と西国をむすぶ幹線道路が通過していました。

この半島の付け根、名古屋との境の地域を一躍有名にしたのが桶狭間の戦いです。数万人という軍を率いて駿河から尾張を攻めようとした今川義元に対し、三千人程の信長軍が大勝利をおさめました。この時から三英傑と呼ばれる信長・秀吉・家康の歴史が始まり、この戦いがキッカケとなって日本は中世から近世へと動いたともいえます。

その日、今川軍が狙ったのが占拠していた大高城の直ぐ東に陣取る、織田方の鷺津と丸根の砦でした。それらが易々と落ちたことが義元の油断になりました。一方これも今川方だった鳴海城を攻めると見せて情報収集で敵の本隊をつかんだ信長は、天候を味方にして千載一遇のチャンスをものにしました。(図1)

その鳴海城下から大高城下を通過して知多半島に向かう道があります。江戸時代

には名古屋と知多半島を結ぶ要の道だった「常滑街道」です。

2 知多半島への道…常滑街道

(1) 名古屋から半島への道

知多半島は西海岸を西浦、東海岸を東浦といい、それぞれの浦の集落間を中心に海上交通が盛んでした。しかし名古屋とのつながりが強まるとともに名古屋と半島を結ぶいくつかの陸上

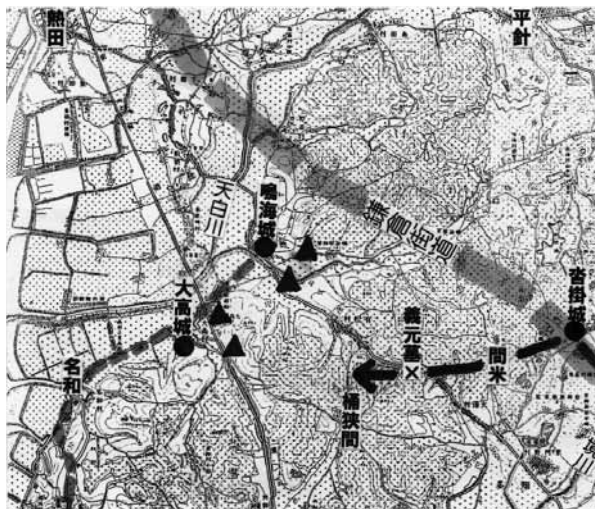


図1 桶狭間の戦いと常滑街道

の道も歩かれるようになりました。

その道筋は基本的には西浦と東浦の海岸沿いの道ですが、名古屋とのつなぎ部分で幾筋かに分かれました。尾張誌付属の地図ではこの付近に5本の街道が描かれています。(図2) ①は西浦沿い、②、③は中筋を通過して半田へ、④、⑤は東浦への道です。

道の名前は公用道ではないためいろいろに呼ばれました。明治の初めの県道名では、①が常滑街道、②が半田街道、④は大高を出て緒川まで行き刈谷に渡って大浜港に向かう大浜街道となっています。④の道は元々、緒川から東浦を南下し半島の先端師崎に行く師崎街道だったようです。その後も時代とともにいろいろ変わりましたが、ここでは上記に倣い江戸時代の鳴海から大高を通り常滑に行く道を常滑街道と読んでおきます。

(2) 常滑街道

常滑街道は鳴海宿で東海道と分かれ、西に向かい、大高を通り名和で南に向きを変えます。昔はそこから南は海岸を通れず、少し山側に迂回していたようです。横須賀で海岸線に戻ってからは概ね海沿いに朝倉、大野と通り常滑に行きました。

3 鳴海から名和へ

鳴海から名和に向かって歩くことにしましょ

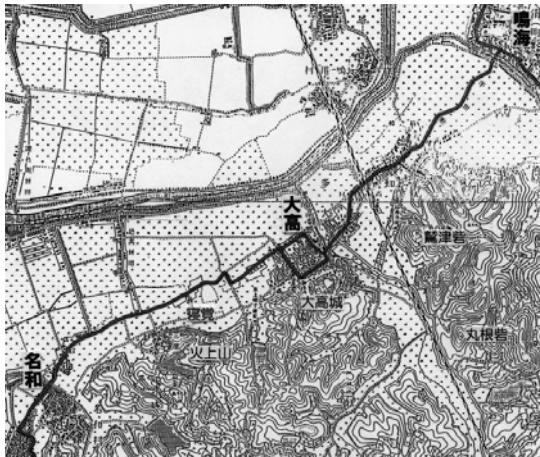


図3 市内付近の常滑街道(明治24年)

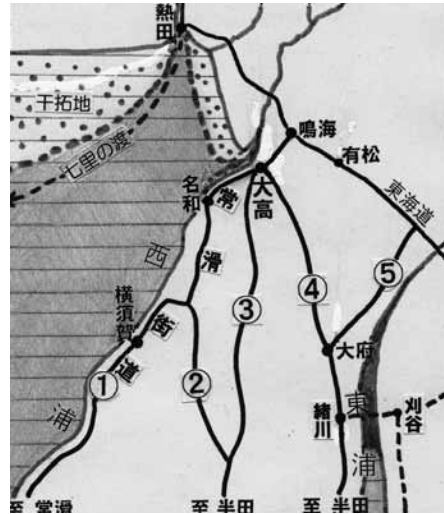


図2 尾張誌付属図にみる半島北部の街道



鳴海八幡宮

う。(図3) 東海道との分岐店は今とは異なり宿場の中央で、そこから西に橋を渡ります。鳴海八幡宮までは昔はくねくね曲がっていたようですが今は区画整理で変わっています。旧道が残るのは緑小学校の横からで、八幡宮の横を通過して正面に出ます。鳴海八幡宮は元、善の輪八幡といいました。本殿の手前に見事な楠のご神木があります。

街道は八幡宮の正面の道を西に進みます。少し行くと右から道が合流します。笠寺の一里塚からの道で、名古屋からは知多街道と呼ばれた半島への近道でした。まっすぐに進むと東海道線の高架橋に出ます。ここから左、400m位の所に公園がありそこを登ったところに鷲津砦跡があります。その隣には知多新四国巡りの87番、長寿寺。さらに丸根砦跡と続きます。

街道は東海道線の下をくぐり、少し行ったところで二手に分かれます。右手という説もありますが、尾張誌の付図では左手が街道になっています。そちらを進むと右に八幡社があり、その向こうの廃ビルは元東海銀行のようです。この辺りは最近まで半田、師崎と続く東浦の街道との分岐点という好立地でした。すぐ大高川の大橋を渡ります。

*

橋の向こうで道は突き当たります。大高の街は主要な道路が口の字型になっており、街道が右回りだったのか、左回りだったのか良く判りません。大高城址に行くため左に曲がると直ぐ秋葉社がありそこを右に曲がります。少し行くと左に2mほどの細い道があります。これが城址に登る道です。

道はすぐ登りになり、右に大高城跡の石碑があります。左を見ると鷲津、丸根の砦が見え始め戦いのイメージが広がります。さらに登ると草地に出ます。ここが城の本丸に当たるところ



大高の口の字の南の道



大高城・本丸



笠寺からの道(左)と常滑街道

です。何もありませんが、鬱そうと茂る大木が城跡らしさを感じさせてくれます。右奥の小高いところに城跡碑が、西側の二の丸の間には堀の跡があります。その横の道を下ると先ほどの石碑のところに出ます。

街道に戻り、口の字の1辺を西に向かいます。突き当たりは酒造で、そこを左に300mほど行くと大高城主が開いた春江院があり、立派な書院が目につきます。

さて、酒造のところに戻り北に向かいます。右から口の字の左回りの道と合流すると、すぐ石仏のある角にでて、そこを左折します。少し行くと左側に墓地が現れ、右も墓地になると2階建の幹線道路(国道23号)にぶつかります。

*

道路を信号で迂回して街道の延長線を進むと、2本目の道は氷上姉子神社の参道になります。

氷上姉子神社は熱田神宮のルーツで、日本武尊の妃となった宮簀媛を祭る神社です。参道を左に登ると、熱田神宮の齊田があり、6月のお田植え祭は有名です。さらに上ると左に神社の入口があり、Uカーブをした先に本殿があります。

神社の入口から反対側に元宮があります。創



石仏を見て西に進む



▲火上山の元宮と宮簀媛住居跡碑

◀氷上姉子神社

建とされる195年から690年まではお宮はこの上の火上山にありました。昼なお暗い林を抜けて登ると、少し広い平地の奥に元宮と宮簀媛の居宅跡の石碑があります。市内とは思えない深い林の中を回ると参道に戻ります。

参道を下ると街道に合流し、その先は一の鳥居です。街道は鳥居から西に向いますが一部宅地の中に消え、しばらくして鳥居の先の道を西に行ったところに出ます。そして砂畑という交差点を過ぎるとすぐ東海市に入り、街道は車の行き交う道を名和に向かいます。

4 日本武尊と宮簀媛

日本武尊は東征の時、尾張の国に滞在しましたが、その滞在先は熱田ではなく、この火上山とされています。左に伊勢湾、正面に年魚市潟、右に鳴海潟を見下ろす火上山は海人族の尾張氏の先祖にとって絶好の拠点だったといえます。随行し、そこに導いた建稲種命はその主張の国造の祖乎止与命の息子で、妹が宮簀媛でした。



火上山付近から熱田(正面)を望む

建稲種命宅に寄った武尊は媛に惚れ、結婚を約して東征に旅立ちました。帰路再び立ち寄った武尊は長く留まりました。そして「婚(まぐはい)」出来たのでしょうか、伊吹の悪神を退治に旅立っ

て、不帰の人になったと古事記は伝えています。

街道の砂畑の交差点から少し南に入った所に武尊ゆかりという「寝覚」という地名があります。この辺りは昔潮騒の聞こえる浜辺でした。

〈火上の丘と寝覚の浜〉

若い武尊と宮簀媛のロマンが目に見えそうです。

鳴海から大高を通過して名和へとつづく道は、信長の出世の故地と日本武尊のロマンの舞台をぬって、知多半島に向かっていきます。

見渡せば 雪の伊吹も 火上山

〈主な参考文献〉

- ①愛知県歴史の道調査報告7
「常滑街道・師崎街道」(1991, 愛知県教育委員会)
- ②名古屋文化財叢書92
「なごやの街道2」(1994, 名古屋市教育委員会)
- ③熱田神宮資料「尾張国熱田太神宮縁起」(2002, 熱田神宮)
- ④町史編纂委員会「大高町誌」(1965, 大高町)



「寝覚」の里の碑(裏手にいわれの石碑あり)